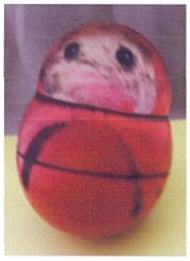
野木村　政三

縁起物・置物



お正月には、セルロイドの縁起物をよく買ったものです。

学研の国語大辞典（金田一春彦・池田弥三郎編）によりますと、

「縁起とは神社や寺などのできた由来や変遷、または御利益などについての伝説。また、それを記したもの。縁起物とは、縁起を祝うための品物。縁起のよいもの。だるま、招き猫、酉の市の熊手など」となっています。

日本人は、正月や結婚式などには「おめでとうございます」と挨拶をいたします。そこでの引き物には「ツルは千年、カメは万年」といわれる鶴や亀の模様のついたものが喜ばれます。鶴と亀のカップルは、天と地、陽と陰、白と黒のように対照的な動物です。

人は誰でも鶴や亀のほどの長命ならずとも、長生きをしたい、と思っています。そこで、昔の人は右の写真のような鶴・亀の可愛いセルロイドの置物を買われたようです。

下の写真のような七福神の宝船や仏像の置物も、祝い事の引き物に喜ばれました。これらは一見、象牙で出来ているように見えます。しかし、この材料はセルロイドなのです。

昭和初期の頃、アメリカは、日本からのセルロイド製品の輸入が多すぎるため１固あたり１セントのピース税をかけました。

そこで日本のセルロイド加工屋さんが考えたのが、出来上がった宝船や仏像

の底に穴を開けて、石膏を流し込む方法でした。
「これは99%が石膏であり、セルロイドとは言えない。文句があるなら材料分析をしてもらいたい」と日本側が抗弁して云い逃れ、ピース税を逃れた、という話が伝わっています。

セルロイドの玩具・人形・縁起物・置物は、ブロー成型という方法で作ります。

①表裏2枚の金型をガスで温める
②セルロイド板2枚を金型の間に挟む
③セルロイド板2枚の間の穴から空気を送ると板が上下（前後）にふくらむ。
④金型の上の一枚を外す
⑤水をかけ金型を冷やして半製品が完成。

モデル
平井英一さん

これらのセルロイド加工は単純な作業ですが、作業者にとっては金型の材料が真鍮ですので非常に重い（約20㌔）ため、過酷な労働でした。
セルロイドの金型の素材に真鍮が用いられたのは、銅が熱電導に優れていたことや、日本各地で銅が産出され銅輸出の時代だったからとも考えられます。

真鍮は、銅70%亜鉛30%の合金です。セルロイド加工が始まったばかりの頃は、金型の材質は、鈴20%銅80%の合金＝青銅（砲金）、だったといわれています。

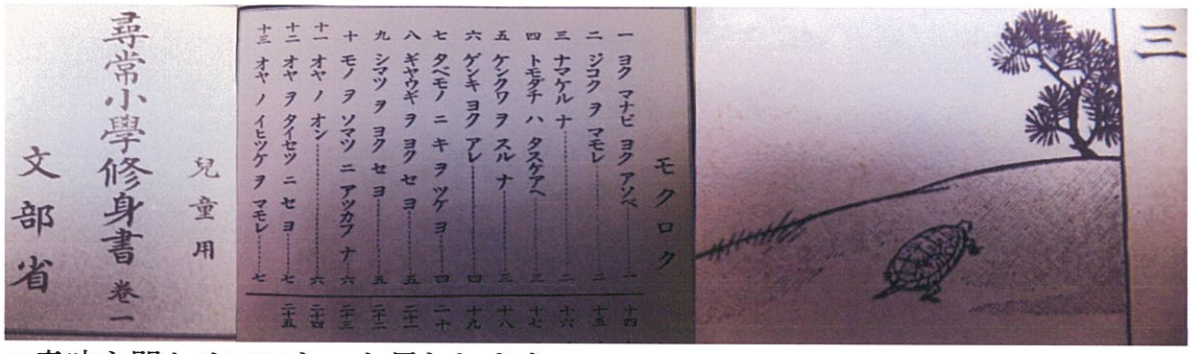
左は、セルロイドハウス横浜館収蔵の銅鏡の写真（実物・直径25㌢）です。
この 2 枚の銅鏡の材質は青銅です。表面が鏡で、背面に鶴と亀が描かれています。
銅鏡は、古代中国から日本に伝わりました。が和銅元年（708年）に埼玉秩父郡の和同村に銅山が発見され、銅鏡も国内で作られるようになりました。
銅鏡は、ガラスの鏡が無かった時代に高貴の方の大切な嫁入り道具でした。鏡の裏に描かれた鶴と亀は、良縁が永遠に続くことを意味しています。

＊＊＊

セルロイドハウス横浜館に明治、大正、昭和初めの小学校の修身・算数・国語などの教科書.展示コーナーが設けてあります。ツルの恩返しや助けたカメに

乗って竜宮城に行く浦島太郎などのことが書かれてある本もあります。

下の写真の尋常小学修身書・巻一には、モクロクの一から二十五まで絵が描いてあるだけで文章がありません。授業中の児童は絵を見つめ、先生が口頭で



絵の意味を聞かせていた、と思われます。

三、ナマケル　ナ　は亀の絵です。「砂浜の子亀を育てるため、親亀は一日たりとも『ナマケ』ないで、子カメの餌とりに海との間を往復しています、人間も亀を見習って『ナマケテ」はいけません」と教えていた、状況が偲ばれます。

＊＊＊

東京江戸川区のセルロイド人形メーカー中島製作所さんは、黒いキューピーをヒットさせました。

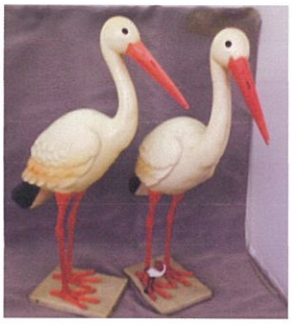
右の写真はセルロイドハウス横浜館の展示品です。背中に中島製作所さんの「亀」のトレードマークが彫ってあります。

＊＊＊

コウノトリの羽毛は大部分が白色、羽は黒色で、足が赤い。巣は木の上に作り、かえる・魚などを食べる。現在日本に生息する数は少なく、特別天然記念物になっている。(学研・国語大辞典)

右の写真は、セルロイドハウス横浜館収蔵のセルロイドのコウノトリです。実物大４５㌢の置物。右側の足元に、３㌢の瀬戸物の鶴をおいて撮ったのですが目立ちません。

この置物を２㍍の高所から落としてしまったのですが、全く異常ありません。セルロイド製品は軽くて頑丈なのです。



子供をつれてくる幸福の鳥・コウノトリは鶴の仲間です。東京都立多摩動物公園で、コウノトリを金網の中で飼育しています。飛び跳ねているコウノトリの群れを観察出来ます。　(了)